研究ノート

内モンゴル人民革命党の第一期中央執行委員会について

ハムゴト

はじめに

内モンゴル人民革命党（以下、内人党）は内モンゴル近現代史上、①1920～30 年代、②第 2 次世界大戦直後、③文化大革命時、④近年を含め 4 度登場し[1]、同一の党組織と言いがたいが、近現代内モンゴル政治史を考察する場合、けっして見逃すことができない存在である。それゆえ、筆者は「1920 年代における内モンゴル人民革命党の活動について」（『中国四国歴史学地理学協会年報』第 12 号、2016 年、以下、前稿）でその歴史について論じた。先行研究は党史研究だけでなく、郭道甫（郭濬黄、墨尔色、メルセ）、席尼喇嘛（錫尼喇嘛、ウルジージャルガル）など一部指導者の人物研究に至るまで広く検討されており、前稿でも大いに参照した。しかし同党の指導中心である中央執行委員会のメンバー構成については専論がなく、党史研究のなかで簡単に言及している程度であり、しかも各学者の観点にかなりの差異がある。

本稿では先行研究の成果を確認し、日本の国立公文書館、外務省外交史料館所蔵の史料と台湾で公刊された『国史館現蔵民国人物伝記史料彙編』（第 1 輯）などを使い、中央執行委員会とその常務委員のメンバー構成に限定して考察する。

1. 内人党の成立

以下、前稿とも一部叙述が重複するが、行論の必要に応じて、ごく簡単に内人党の成立をめぐる問題を確認しておく。

1900 年前後、既に清帝国からの分離を考えていた外モンゴル[2]は、1911 年

12 月 29 日、ジェブツンダムバ・ホトクト 8 世（ボグド・ハーン）を君主とする政府を樹立した。そしてモンゴル新政府（ボグド・ハーン政権）が目指したのは独立宣言の主体となった外モンゴルだけでなく、内モンゴル、バルガ（現フルンボイル、後に内モンゴルと合流）などを含む全モンゴル人の統一独立国家であった。しかし独立の後ろ盾であるロシア帝国が新生の中華民国との協調を選択し、中華民国の宗主権下の外モンゴル地域での「自治」政府に格下げられ、1919 年、北京政府は外モンゴルの自治権を取り消した。

自治の恢復を目指してボグド・ハーン政権と、別々に活動していた二つの革命グループが 1920 年春ごろに結成したモンゴル人民党（後にモンゴル人民革命党と改称、以下、人民党と略す）とが協力し、1921 年にモンゴル革命を引き起こし、ソ連・コミンテルンの支援の下、同年 7 月にボグド・ハーンを首長とした「制限君主制新人民政府」を樹立した。1921 年 9 月に主として人民代表からなる「臨時議会」を設置し、11 月に王公の世襲を廃止する決定がなされ、1923 年には貴族のあらゆる特権が廃止された。つまり、外モンゴルでは民族革命の成果を踏まえ、コミンテルンの内政干渉のもと民主革命に重点を置いた。1924 年 5 月 20 日にボグド・ハーンが死去し、また外モンゴルに対する中華民国の主権を認定した中ソ協定に対抗するため、6 月に共和制へ移行を決議し、同年末ごろ国会を開き、憲法を制定した[3]。

1922 年以降、内モンゴルのこれまで各々活動していたフルンボイル、ハラチン、オルドスの三つの革命グループはそれぞれ外モンゴルを訪れ人民党と連絡し、フルンボイルの郭道甫、富明泰（福明泰、ボヤンゲレル）やオルドスの錫尼喇嘛らは人民党に参加した[4]。そして三グループが合流し、1925 年 10 月 13 日に正式に成立大会（内人党第一回大会）を開いた。同大会では白雲梯（ボヤンタイ、チェレンドンロブ）を委員長に、郭道甫を書記とする中央執行委員会を選出した。内人党は「外部」における軍閥と「内部」における王公両方の支配を打倒することを課題とした。

1926 年 1 月 13 日に、内人党は内モンゴル各盟旗各団体代表大会を開催し、その後「内モンゴル人民代表大会」を組織するというプログラムを立て[5]、民衆の動員に重心を置いた。しかし、内人党は 1927 年 7 月 10 日に「三ヶ月以内に必ず党第二回大会を開催する」としたが、8 月 10 日にウランバートルで

開かれた特別大会で同党の中央執行委員会、とくに常務委員会は富明泰、郭道甫（秘書長より免職されるが中央委員の身分は保留された）以外全員が排除された。党の新しい指導部がコミンテルン主導で選出され、内人党は分裂したのである[6]。内人党が実際に行った党大会はこの成立大会だけであったといえよう[7]。

２．先行研究の成果と関連する史料

ボルジギン・フスレによれば、内人党第一回大会では 21 人からなる中央執行委員会を選出し、その内、7 人が常務委員となったという見解が、「すでに【学界で】（以下【】は筆者注】）定着している」[8]。その根拠の一つは、「北京労農露国大使館」から押収した文書を利用した野津彰の説であり、内人党第一回大会では、先ず党中央執行委員 21 名を選定し、常務委員として、白雲梯、楽景涛（モロンガー）、包悦卿（サインバヤル）、李丹山（李鳳岡、マンダルト）、郭道甫、富明泰、伊徳欽（デチン）の 7 名を選出したと述べた[9]。しかし、野津はほかの 14 人の顔ぶれについては、ふれていない。

図１　内人党中央執行委員会常務委員会の写真[10]

常務委員 7 人説のもう一つの根拠は、図 1 の写真である。写真に写っている人物の顔ぶれは、Atwood によれば前列左側から金永昌（金勛卿、ノモンビリグ、アルタンオチル）、富明泰、郭道甫、白雲梯、楽景涛、包悦卿、李丹山であり、後列左側からは人民党のボヤンネメフ、人民党委員長ダムバドルジとコミンテルン代表ブリヤート・モンゴル人オシーロフである。また、郝維民は同写真を使わず当時者の回想録を利用したが、常務委員 7 人の顔ぶれはまったく同じである[11]。

つまり、フスレが定説だとするのは、図 1 の写真と当事者の回想を根拠に、常務委員は伊徳欽ではなく、金永昌と、富明泰、郭道甫、白雲梯、楽景涛、包悦卿、李丹山の 7 人だったという考えである。だが、なぜ金永昌ではなく、伊徳欽が常務委員とする見解が示されたのかについて、いまだ明らかになっていない。

また、フスレと Atwood の主張の相違点は、写真の後列の外モンゴル、コミンテルンの参加者の内人党における身分についてである。Atwood は 3 人をすべて外国人アドバイザーとしたのに対し[12]、フスレは写真中のボヤンネメフとオシーロフを内人党の常務委員とした。さらに、内モンゴル出身の呉子興（アルタ）をも常務委員であったと考え、従来の「定説」に異を唱えて、新たに常務委員 10 人説を提起した[13]。

まず写真後列の 3 人について、検討してゆく。二木博史は、当時の人民政府の内モンゴル革命援助は、人民党の「モンゴル系の諸族と結び、全モンゴル族を統一する」という方針のもとに行われたため、ダムバドルジとボヤンネメフは内人党の成立に自ら参加したとみなした[14]。さらに中央執行委員会のメンバーについて、氏は、「当時の信頼すべき資料【＝外務省外交史料館所蔵の 1926 年の藤野進報告「内蒙古自決運動ニ就キテ」[15]】は、チチンビリクト、アルタ、ワチルの名前を挙げている」と指摘し、図 1 の写真を根拠にワチルとはおそらくオシーロフであろうと判断した。また藤野報告で外モンゴル出身であるとされたチチンビリクトとアルタについて調べた。

二木はチチンビリクトがボヤンネメフのペンネームであることを指摘し、「ボヤンネメフが内モンゴル人民革命党中央委の執行委員に選ばれ、雑誌の発行に従事していたことは今日の外モンゴルでもよく知られている」ことに

触れた。また「断定はできないけれども」アルタを人民党の機関紙の編集長を務めたバヤニー・ナムスライ通称アルタン・ナムスライの可能性が高いとした。そして外モンゴル出身者 2 名が執行委員に選ばれたことは、「ダムバドルジ政権は内モンゴル人民革命党をイデオロギー面で強化しようとした」ことを意味すると主張した[16]。

しかし、問題なのは、藤野進報告そのものの信憑性はどの程度なのかということである。藤野がふれたチチンビリクト、アルタ二人の情報を整理すると、「内蒙国民党【内人党】本部（張家口）ヨリハ Dotoγadu Mongγol-un arad-un sedkül（漢訳『内蒙国民旬刊』）ト称スル蒙古文旬刊雑誌ヲ発行ス菊版約六十頁ナリ該党ノ宣伝ヲ主トシ併セテ支那政局ノ大要ヲ掲ク」、「主筆チチンビリクト、編集印刷アルタ、共ニ内蒙国民党委員ナリ、親ソビエット排外ノ記事多ク毎号数葉ノ漫画ヲ添へ排外ヲ宣伝シ蒙古人ノ覚悟ヲ促シツツアリ」とした[17]。

藤野報告はモンゴル語、漢語の一次史料を添えている。しかし、氏の自筆の報告は、当時 30 歳初頭の白雲梯を 52 歳とし、ボヤンネメフを「急進思想ヲ有スルモ支那官憲ト内通セリトテ外蒙ヲ逐ハレカル者」としており、間違った情報を含んでいる。ボヤンネムフが「外蒙ヲ逐ハレ」たのは、急激な「民主化」を外モンゴルで進めようとした[18]コミンテルンの指導をめぐって起こった人民党内部の対立のためであり[19]、「支那官憲ト内通」したからではない。「蒙古語研究」をし、「平素蒙古人ニ接シ蒙古事情ヲ研究シツツアル」藤野は留学生としてモンゴル人と接触したと思われるが、実際に内人党員との交流があったとは到底考えられない。また、一次史料を手にいれたフスレは、アルタは内モンゴル出身の呉子興であることを明らかにしている[20]。

したがって、後ろの 3 人については、現在、もっとも確かな見解は、3 人のなか、ボヤンネメフは内人党に参加し、内人党のプロパカンダを担当していたことである。

次に常務委員としての伊徳欽と金永昌をめぐる問題について、検討してゆく。寺島英明は、中央執行委員会の顔ぶれは、「右派の白雲梯が委員長、左派の富明泰が副委員長、同じく左派の郭道甫が書記長に就任し、外モンゴル出身のチチン・ビリグト【ボヤンネメフ】、アルタ【呉子興】、内モンゴルの金

永昌、李丹山、包悦卿、楽景涛、伊徳欽の 7 人が委員となった。内モンゴルの五人の委員は右派である。左派と右派の均衡がとれていることが明確であるが、外モンゴル出身者が中央委員会委員となっていることからも、内モンゴル人民革命党が外モンゴルと結びついていたことがわかる」とした[21]。氏は同じく藤野報告を参考したほか、外務省外交史料館所蔵の「内蒙国民革命党略史」を利用した。同文書の記述は野津彰の記述と一致している[22]。

つまり、藤野報告と図 1 の写真は、金永昌を常務委員とする考えを示したのに対し、1931 年以後の日本側の史料は、「中央委員会 21 人、伊徳欽を含む 7 人の常務委員」の観点で統一されている。それは 1930 年代の日本側の内モンゴル情勢に大きな影響を与えた 1931 年の極秘文書「内蒙国民革命党略史」に伊徳欽のみで金永昌の名前がないためであった。

そのことの要因として一つ考えられることは、「内蒙国民革命党略史」の著者である「一内蒙国民革命党員」とは、金永昌本人（あるいはその意を受けた人）だということである。筆者は以下の理由により、その可能性は高いと考えている。

金永昌と伊徳欽は、内モンゴルにおける近代教育を開いた王公・グンサンノルブが 1906 年、最初に日本に留学させた学生であり、二人は後にともに東京農科大学（現東京大学農学部）に進学した[23]。

金永昌が 1926 年 7 月 4 日に「突然」日本の張家口にあった領事館を訪れ、領事山崎誠一郎に面会した機密情報が、外務省外交史料館に所蔵されている。彼の目的は日本に留学生を送ることを相談することであったが、一方内人党の内部情報を日本外交官に漏らしていた[24]。そしてよく知られることに、彼は 1933～1936 年の間は関東軍の内モンゴル工作の顧問、高級通訳として参加し、内モンゴル西部各勢力に日本との接近を働きかけていた。

伊徳欽は 1932 年 4 月 7 日～12 日に洛陽で開催された国難会議（満州国の成立、第一次上海事変を背景に、日本の侵略という国難を救うことを目的とした）にモンゴル人代表として参加し、内モンゴル西部を日本の侵略から守ることを要求していた[25]。この点から日本の内モンゴル東部での活動が既に頻繁になっていた 1931 年 4 月 11 日に日本側と伊が接近していたとは考えにくい。白雲梯、李丹山、包悦卿、楽景涛は元々日本語教育を受けた経歴がな

く、伊徳欽と同じく日本への批判を強めていた。富明泰は、1931 年頃コミンテルンによってソ連の東方勤労者共産大学に送られ勉強していた。張学良の幕僚となった郭道甫は「フルンボイルの国際関係をみれば、北からはスラブ民族の侵略があり、東方からはまた日本帝国の野心・陰謀がある。みなバルガ【フルンボイルのモンゴル人の自称】民族を俎上の肉、釜の中の魚とみている」と反日の言論を発していた[26]。それゆえ日本との接近をはかる金永昌は、自らが内人党の指導部であったことを意図的に隠したのであろう。

以上の点を踏まえて、今日の学界の到達点ともいうべき Atwood とフスレの研究について、改めて触れておく。

Atwood はモンゴル国、アメリカの文書館の史料、とくにモンゴル国の一次史料を中心に、さらに内モンゴルの文史史料を慎重に使い、学術的な価値の高い研究を進めた。筆者も、氏が発掘した史実の多くを参考にした。ただし、氏自身も認めているように中央執行委員会に関しては、研究が十分ではなく、不明なところが多い。それはおそらく、日本や台湾での関係史料をほとんど使っていないことによるのであろう。

Atwood は 1925 年 10 月の時点では、金永昌（宣伝部担当）、富明泰（組織部担当）、郭道甫（秘書）、白雲梯、楽景涛、包悦卿、李丹山の 7 人が中央執行委員となり、ダムバドルジ、ボヤンネムフ、オシーロフは同党の組成に携わった外国人アドバイザーであるとした。また氏は 1925 年 11 月に組織部の担当者が富明泰から呉子興へ、1926 年夏に宣伝部の担当者が金永昌から額爾根巴図（エルヘムバト）にかわり、1927 年 4 月に郭道甫にかわって伊徳欽が中央執行委員会の秘書になったとした。そして 1926 年 8 月～12 月にナスンバトが人民党代表として内モンゴルを訪れ、外国人アドバイザーの役を担ったとした[27]。

富明泰については、1925 年 11 月から 1926 年 8 月の間、武器の調達や軍事的な連絡・交渉のためウランバートルと内モンゴルを往復し、またレーニングラード（現サンクトペテルブルク）を訪問していたと論考した。換言すれば、富明泰は人民党そしてコミンテルンにおける内人党の代表といってよかろう。呉子興は富明泰のかわりに組織部を暫時に担当し、またボヤンネムフと一緒に the agony of Inner Mongolia（内モンゴルの苦難状況）というパ

ンフレットを著し、1926 年 3 月に党の資金を張家口からヘシクテン旗に運送する途中に、おそらく匪賊に殺されたとした。

金永昌は 1925 年 11 月 12 月頃に荊棚で創設された蒙古軍官学校の責任者で、1926 年 8 月からはウランバートルでの内人党代表の相談役を担い、同年 12 月に人民党の第五次大会に参加したとされている。なお蒙古軍官学校は楽景涛が創設し、同時に彼は蒙旗民兵訓練処を設置している。

ボヤンネメフは 1925 年 11 月から『内蒙国民旬刊』において歌、リーフレット、記事・論説を作成・登載し、内人党の宣伝に従事したが、翌年春頃に外モンゴルに帰還しブリヤートにプロパガンディストそして党組織者として派遣されたとした。

駐北京ソ連領事館に働いていたオシーロフは 1925 年 3 月[28]にコミンテルンのエージェントとして内モンゴルを訪れ、内人党の組織に携わり、その創立者の一人であった。オシーロフは 1925 年 10 月より 1927 年 5 月までコミンテルン代表として内人党の事務に加わり、1927 年春頃に短期的に帰国していたが、同年 5 月にコミンテルン極東書記局の対外モンゴル政策に関する会議に参与し、同年 7 月におそらく病気のため内モンゴルに対する責務からはずされたとした[29]。

他方、フスレは、図 1 の写真と藤野報告、そして中央執行委員会が 1925 年「陽暦 12 月 20 日」に出した公告（内モンゴルで 1986 年に公刊された史料に含まれていたもの）を根拠に、先述した 10 人説を提出した。そしてボヤンネメフ、オシーロフの「2 名の外国人の幹部会員の存在が、コミンテルンとモンゴル人民共和国の内モンゴル革命に対する指導的地位を象徴しているといえるならば、出身からみれば、フルンボイル人、内モンゴル人とブリヤート・モンゴル人、ハルハ・モンゴル【外モンゴル】人により構成された内モンゴル人民革命党の指導部の存在は、同党のパンモンゴリズムの性格をあらわしていたとみることができるだろう」[30]とした。

しかし、先述したように 1926 年 6 月までの内人党に関する情報源はほとんど内人党の刊行物であり、フスレが使用した同公告もおそらくそのなかの一つであろう。だが Atwood の論考が示したようにちょうどこの時期に中央執行委員会内部では人員の異動があり、こうした内部事情の詳細が公的な刊

行物だけの考察から知ることができるとは考えられない。また、図 1 と同日に撮られた図 2 の写真の第 4 列左から 1 番目は呉子興である。もし、10 月 13 日の成立大会時点で、呉子興が中央執行委員会の常務委員であったとすれば、彼が図 1 の写真に写っていないことに説明がつかない。

図 2　内人党成立大会参加代表（モンゴル人民革命党中央文書館所蔵）[31]

３.「白雲梯先生事略」からみた中央執行委員会常務委員

1988 年に公刊された「白雲梯先生事略」[32]は、白の死後に、彼の経歴をまとめたものである。Atwood は内人党委員長である白雲梯の活動に当然ながらかなりの関心を寄せ検討したが、彼が参考とした台湾の 1970 年代以前の文書記録は、「白雲梯は党の正式成立を【孫文が死去した】1925 年 3 月だと訴え、内人党の国民党との関係を孫文の遺教に即したものと強調」するなど、信憑性が低いと判断していた[33]。しかし「白雲梯先生事略」は「国民党との密接な関係」を依然として主張する傾向が見られるが、これまでの文書記録に含まれてない重要な情報も提示している。

「白雲梯先生事略」の中央執行委員会に関する記述は次のようなものである。

民国 14 年【1925 年】3 月 1 日、内蒙古国民党【内人党】第 1 回大会が張家口において開催され 125 名の代表が出席した。当時、国父【孫文】は病んでおり、李列鈞、徐謙などを中国国民党代表として派遣した。外モンゴルからの参加者は丹巴多爾済【ダムバドルジ】、阿木爾【アムル】、根敦【ゲンデン】、那遜巴図【ナスンバト】、博彦諾穆祜【ボヤンネメフ】など 5 人である……内蒙古国民党の組織は、中央部会と地方部会に分けられ、中央部会には中央執行委員 21 席を設け、その中 7 人を常務委員、1 人を委員長とする……第 1 回大会は中央執行委員白雲梯、郭道甫、包悦卿、楽景涛、金勳青【金永昌】、李丹山、福明泰、王徳尼瑪【旺丹尼瑪、ワンダンニマ】、蒙和烏勅吉【席尼喇嘛の側近】、包楞布、沙克達爾【シャグダルジャブ】、達崇阿、博彦諾穆都祜【ボヤンネメフの誤記】、伊徳欽、呉冠卿【呉恩和、エンヘブリン】、呉子興、阿拉林格根、新喇嘛【席尼喇嘛】、卓徳巴札布、吉雅泰、額爾根巴図等 21 人を選出し、先生【白雲梯】および郭道甫、包悦卿、楽景涛、李丹山、金勳青、福明泰を常務委員とし、先生を委員長に選出した[34]。

「白雲梯先生事略」と Atwood の論考を整理すれば、まず常務委員は伊徳欽なのか金永昌なのかという問題についていえば、1925 年 10 月 13 日の時点では白雲梯、郭道甫、包悦卿、楽景涛、金永昌、李丹山、富明泰の 7 人が中央執行委員会の常務委員に選出されたということになろう。また、呉子興、伊徳欽、額爾根巴図は成立大会より中央執行委員会に属していたため、後に常務委員の責務をはたしたのである。

図 1 の後列の三人について、「白雲梯先生事略」とフスレの論考を整理すれば、成立大会では人民党からダムバドルジ、ボヤンネメフが参加したが、ボヤンネメフだけが中央執行委員会に選出された。オシーロフはコミンテルンから派遣され内人党の樹立、指導に携わった人物であるが、中央執行委員会のメンバーではない。

「白雲梯先生事略」の 21 人の中央執行委員会の顔ぶれを見れば、人民党と頻繁に連絡し民主を訴える郭道甫、白雲梯、席尼喇嘛、王徳尼瑪らだけで

なく、沙克達爾、楽景涛、伊徳欽など王公出身者やチャハル部の総官である卓徳巴札布、そして呉冠卿、李丹山など当時の王公の活動[35]に同調していた人物も含んでいた。つまり、成立時点の内人党は漢人の地方実力者の内モンゴル支配に反対することで共通認識をもつ内モンゴル各階層の人物を含み、民族主義的な性質を持っていたのである。そしてダムバドルジがアムル、ゲンデン、ナスンバトといった彼の政権の重要な官僚を率いて張家口に訪れたのも、二木が指摘したように、「モンゴル系の諸族と結び、全モンゴル族を統一する」ためであった。

しかし、筆者が前稿で指摘したように、コミンテルンそして人民党の一部指導者は常にプロレタリア革命を重視した。そして政権内の王公やラマ勢力の排除をめぐる人民党とコミンテルンの対立が内人党まで波及し、その指導下での内人党が実際に行ったのは王公打倒を目指す民主革命であった。つまり、ボヤンネメフ、オシーロフの内人党参加は、フスレのいうように「パンモンゴリズム」の性格を示すというよりも、民族主義的な性質を持っていた内人党の活動を民主運動に転換させたのである。

おわりに

本稿で、筆者は先行研究の成果と関連する史料、とくに「白雲梯先生事略」を使用し、内人党中央執行委員会とその常務委員会の顔ぶれを検討した。従来の研究では、史料の不足によって中央執行委員会とその常務委員会を混同し、それがさらにいろいろな誤解を招いた。「白雲梯先生事略」は、先行研究とそのもとになった史料とかなりの一致性、関連性を見せており、中央執行委員会に関する情報は信憑性が高いと判断される。

内人党は 1925 年 10 月の成立大会では 21 人からなる中央執行委員会を選出し、その時点では金永昌、富明泰、郭道甫、白雲梯、楽景涛、包悦卿、李丹山の 7 人が常務委員であり、11 月からは、呉子興、ボヤンネムフ、翌年の夏には額爾根巴図が常務委員の責務を果たし、軍事的、外交的な要務に工作の重心を移す金永昌、富明泰の替わりに、額爾根巴図が宣伝部を、呉子興が組織部を担当した。分裂直前の 1927 年 4 月の伊徳欽の秘書担当は、1927 年 7 月 10 日の公告から顕わになった白雲梯と郭道甫の対立の先触れである。

[1] 星野昌裕「内モンゴル人民革命党と中国共産党による地域統合：20 世紀半ばまでの政治展開」（『アジア研究』第 44 巻第 4 号、1999 年）、39 頁。
[2] モンゴル国は歴史上、中国が「外モンゴル」と呼んできた地域を中心とし、その独立後は当然、自らを「外モンゴル」と呼ばない。筆者もモンゴルを中国の「内」と「外」とに分ける見方を正統だと考えるものではないが、内モンゴルとの区別を明示するため、便宜的に外モンゴルと呼ぶ。
[3] 主に磯野富士子『モンゴル革命』（中央公論社、1974 年）、モンゴル科学アカデミー歴史研究所編（二木博史、今泉博、岡田和行訳、田中克彦監修）『モンゴル史』1（恒文社、1988 年）、橘誠『ボグド・ハーン政権の研究：モンゴル建国史序説 1911～1921』（風間書房、2011 年）、青木雅浩『モンゴル近現代史研究 1921～1924 年：外モンゴルとソヴィエト、コミンテルン』（早稲田大学出版部、2011 年）を参考にした。
[4] 二木博史「ダムバドルジ政権の内モンゴル援助」（『一橋論叢』第 92 巻第 3 号、1984 年）、367～370 頁、伊盟政協文史委「席尼喇嘛及其領導的“独貴竜”運動」（中国人民政治協商会議内蒙古自治区委員会文史資料研究委員会編『内蒙古文史資料』第 19 輯、1985 年）、23 頁。
[5] ボルジギン・フスレ『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策（1945～49 年）：民族主義運動と国家建設の相克』（風響社、2011 年）、46 頁。
[6] 朝魯孟「内蒙古人民革命党烏蘭巴托特別大会述評」（『内蒙古師範大学学報：哲学社会科学版』第 42 巻第 5 期、2013 年）。
[7] フスレはウランバートル特別大会を内人党の第二回大会とした。フスレ前掲書、49 頁）。確かに、同会議では新たに指導部が選出された。コミンテルンの主導で選出された新指導部からすれば、第二回大会に当たるが、排除された従来の指導者からすれば必ずしもそうではない。
[8] フスレ前掲書、36～37 頁。
[9] 野津彰「内蒙古に於ける赤色運動の変遷」（興亜院『調査月報』第 3 巻第 10 号、1942 年）、9 頁。
[10] *Christopher P. Atwood, Young Mongols and Vigilantes in Inner Mongolia's Interregnum Decades, 1911-1931(Volume One, Volume Two), BRILL, 2002. 以下、Volume One、Volume Two と略。*この写真が最初に使われたのはおそらく И. И. Генкин. Два съезда монгольской народной партии. *Новый Восток, No.12,* 1926（ゲンキン「モンゴル人民党の二つの大会」、『新東方』第 12 号、1926 年）であろう。日本では坂本是忠がゲンキン論文の写真を当時彼らと面識のある人物に確認させ、全員の顔ぶれを明らかにした。坂本是忠「第一次国共合作期における内蒙古民族運動」（『近代中

国研究』第 6 輯、1964 年)、66 頁。同写真の原本は現在モンゴル国のモンゴル人民革命党中央文書館に所蔵されている。ボルジギン・フスレ前掲書、38 頁。

[11] 郝維民「第一、二次国内革命戦争時期的内蒙古人民革命党」(『中国蒙古史学会成立大会紀念集刊』、中国蒙古史学会編印、1979 年)、584 頁。

[12] *Volume One,* p490.

[13] フスレ前掲書、36～40 頁。ちなみに、フスレは呉子興を「呉子徴」と誤記している。

[14] 二木前掲論文、371、375～377 頁。

[15] 藤野進調査「内蒙古自決運動ニ就キテ」(芳澤謙吉「内蒙古自決運動ニ関スル調査提出ノ件」1926 年 6 月 8 日、『満蒙政況関係雑纂／内蒙古関係』第一巻、外務省外交史料館所蔵、レファレンスコード：B02031779100)。

[16] 二木前掲論文、371～372 頁。

[17] 藤野前掲「内蒙古自決運動ニ就キテ」。

[18] 青木前掲書、390 頁。

[19] ボヤンネメフの活動に関し、青木前掲書のほかに、生駒雅則「モンゴル人民革命党とコミンテルン：コミンテルン駐在代表ルイスクロフの更迭問題をめぐって」(樺山紘一ほか編集『アジアとヨーロッパ 1900 年代～20 年代 (岩波講座世界歴史 23)』、岩波書店、1999 年)、王満特嘎 (岡洋樹訳)「新発見の S.ボヤンネメフ作戯曲「モンゴルを囲む侵略国家間の状況を簡略に示した歴史」について」(『東北アジア研究』第 8 号、2004 年) を参考にした。

[20] 注 12 と同じ。

[21] 寺島英明「近代内モンゴル民族運動」(田中正美先生退官記念論集刊行会編『中国近現代史の諸問題』、国書刊行会、1984 年)、369～370 頁。

[22] 一内蒙国民革命党員「内蒙国民革命党略史」(極秘)、1931 年 4 月 11 日(「内蒙国民革命党略史送付ニ関スル件」1931 年 4 月 27 日、前掲『満蒙政況関係雑纂／内蒙古関係』第一巻、レファレンスコード：B02031780000「6. 昭和六年」)。

[23] 小軍「従喀啦沁旗学校建設看二十世紀初期内蒙古東部地域教育」(『蒙蔵現況双月報』第 17 巻第 4 期、2009 年)。

[24] 山崎誠一郎「喀啦沁旗人金永昌ノ談話ニ関スル件」1926 年 7 月 6 日 (前掲『満蒙政況関係雑纂／内蒙古関係』第一巻、レファレンスコード：B02031779200「1. 大正十五年／4 大正 15 年 7 月 6 日から大正 15 年 12 月 19 日」)。

[25] 彼は 4 月 7 の予備会議より最後の第六次会議まで全部参加した。国難会議

秘書処『国難会議紀録』（文海出版社、1984 年）、35～120 頁。

[26] 郭道甫『呼倫貝爾問題』（大東書局、1931 年）、24 頁。本史料は奥登挂編『郭道甫文選』（内蒙古文化出版社、2009 年）に収録された。

[27] *Volume One,* p490.

[28] フスレによれば、1924 年秋をむかえるまえ、オシーロフはすでに内モンゴルの活動家と一緒に、オルドス地域をまわっていた。フスレ前掲書、34 頁。

[29] *Volume One,* p490. *Volume Two*, pp1009-1037.

[30] フスレ前掲書、40 頁。

[31] *Volume One.*写真を詳細に観察すればわかるように、図 1 の写真と同じ場所で撮られたものであり、そして人物の服装、髪型なども同じであり、明らかに同日に撮られたものである。

[32] 「白雲梯先生事略」（国史館編印『国史館現蔵民国人物伝記史料彙編』第 1 輯、1988 年）。

[33] Christopher P. Atwood, Inner Mongolian Nationalism in the 1920s: A Survey of Documentary Information, *Twentieth-Century China25.2,*(April, 2000).

[34] 前掲「白雲梯先生事略」、128～129 頁、モンゴル人の名前を漢訳する際に、中国大陸と台湾では異なる文字を使う場合が多い。本稿では関連する人物の情報確認に以下の文献を参考した。郝維民前掲論文、599～604 頁、二木博史「ダムバドルジ政権の敗北」（『東京外国語大学論集』第 42 号、1991 年）、生駒雅則『モンゴル民族の近現代史』（東洋書店、2004 年）、44 頁、札奇斯欽『羅布桑車珠爾伝略』（内蒙古人民出版社、2007 年）、85、120～121 頁、張建軍『清末民初蒙古議員及其活動研究』（中央民族大学出版社、2012 年）、439～450 頁、朝魯孟「1925～1931 年間内蒙古人民革命党歴史探述」（2013 年度内蒙古大学修士論文）、29～35 頁。

[35] この時期の王公の民族主義運動に関し、拙稿「近代内モンゴル民族主義運動の一考察：1925～31 年の呉鶴齢の活動を中心に」（『史学研究』第 291 号、2016 年）を参考にされたい。